

スクールカウンセリングの21年

文学部人間関係学科

教授 小野 貴美子

はじめに

スクールカウンセリングとかスクールカウンセラーという言葉はかなり耳なじみになっていると思われる。先の別府地震では臨床心理士会から避難所訪問をさせていただいたが、臨床心理士と言うよりスクールカウンセラーと自己紹介する方が、「ああ」と避難されている方々に納得されたようであった。

さて、スクールカウンセラー活用事業が始まり、今年（平成28年）で22年目を迎えた。筆者は平成7年からの活用事業初年度よりスクールカウンセラーとして、中学校に関わらせていただいている。当時とは社会の様子も違ってきており、学校を取り巻く環境も変化してきている。中学校では居て当たり前になってきているが、配置からこれまでを振り返り、改めてスクールカウンセラーについてお伝えしたい。

1 スクールカウンセラー活用事業

スクールカウンセラー活用事業の背景

不登校の増加、いじめによる自殺問題である。平成に入り、当時は登校拒否と呼ばれていた不登校の増加がまず挙げられる。平成6年度の不登校児童生徒の割合は小学0.18%、中学校1.32%であった。中学校の数値が文部省に危機感を抱かせた。また、平成6年はいじめによる自殺事件や死亡事件が世間を騒がせた。当時のいじめ認知率は1000人あたり小学校3.0件、中学校6.1件、高等学校1.3件である。不登校児童生徒への対応やいじめ対応に学校教員だけでは手が回らず、専門的な

視点が必要になってきたのである。ここに平成7年1月17日の阪神淡路大震災が起き、スクールカウンセラー配置が本決まりとなった。そのため、平成7年度からの始まりではあるが、4月から始まったわけではなく、2学期からであった。

ちなみに、平成6年は橋本聖子団長のリレハンメル五輪があり、向井千秋さんが宇宙へ飛び立った年である。松本サリン事件が起きた年でもあった。携帯電話はまだ普及しておらず、はがきの値段が41円から50円、封書が62円から80円に値上がりした。別府市内の中学校はようやく丸刈り規則がなくなった頃である。

スクールカウンセラー活用事業の変遷

図1に示したように3期に分けられる。初年度は村山内閣であった。当時は勤務時間が1日4時間週2日勤務で2年間という期限付きであった。かかる費用は国庫補助100%で、すべて国からの補助で賄われた。相談室改装費用や備品や図書など必要なものは潤沢に準備できた。その後、政権も変わる中、国からの補助100%が6年続いたのち、平成13年度からは国庫補助が2分の1、残り

スクールカウンセラー活用事業の変遷

第1期(H7~H12)「スクールカウンセラー活用調査研究」事業
全国の派遣校154校(小29、中93、高32) 国庫補助100%

第2期(H13~H20)「スクールカウンセラー活用事業補助」事業
H20(2008)年 公立小学校2万校への全校配置5カ年計画 国庫補助1/2

第3期(H21~現在)「学校・家庭・地域の連携協力推進」事業
「学校・家庭・地域の連携協力推進事業」の中にスクールカウンセラー等活用事業が含まれる 国庫補助1/3

図1 スクールカウンセラー活用事業の変遷

は県負担となって事業は続けられた。このことは県の財政事情がスクールカウンセラーの時給に反映され、平成15年から身分は県の非常勤職となり、時給もぐんと下がってしまった。一方、国の方針でスクールカウンセラー配置は拡大、増加されていった。平成21年からは「学校・家庭・地域の連携協力推進」事業の中にスクールカウンセラー等活用事業が含まれるようになっていく。スクールカウンセラー等とあるのは、地域の実情に応じた取り組みをするために、スクールソーシャルワーカーの導入も始まり、不登校の背景としてある家族の問題や貧困の問題も扱おうとしているからである。第3期からは国からの補助は3分の1となっている。この時大分県スクールカウンセラーの時給は再び下がることはなかったが、全国一低い時給であることを付け加えたい。

平成28年度の文科省の概算要求では、「スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーによる教育相談体制の充実」があり、学校が心理や福祉の専門家や専門機関と連携、分担し、「チームとしての学校」体制を整えようとしようとしている。したがって、スクールカウンセラー活用事業も新しい期に入ったと言える。

2 大分県スクールカウンセラー

大分県スクールカウンセラーの状況

まず、全国のスクールカウンセラー配置校数は、平成7年、全国の小学校29校、中学校93校、高等学校32校、計154校から始まり、平成26年度は全国23800校になっている。大分県の配置校数を図2に示す。平成7年に、別府市と大分市の中学校1校ずつ、高等学校1校に配置された。筆者は別府市内の中学校に勤務することになった。最初の2年がうまくいかないと次はないのだと周囲から発破をかけられ、自らも心して臨んだ。

平成19年より中学校は全校配置となった。図2の大分県の配置校数の推移をみると、配置校数が減っているように見えるが、これは統合などで学校数が減ってきたことによる。平成28年度は小学校65校、中学校125校、高等学校26校である。高等学校では、県からの配置ではなく、学校独自に

スクールカウンセラーを雇用している学校も増えてきている。また、私立学校もスクールカウンセラーを雇用するところが多くなっている。

続いて、大分県のスクールカウンセラーの人数を図3に示す。平成19年に中学校全校配置の際、人数はぐんと増えている。その後、配置校数は増加しているが、スクールカウンセラー人数は減っている。一人で複数校掛け持ちしている状況である。ちなみにスクールカウンセラーの仕事のみで生計を立てている人はごく数名である。

スクールカウンセラーの資格要件を図4に示している。(財)日本臨床心理士資格認定協会認定の臨床心理士、精神科医、大学教官である。さらに、スクールカウンセラーに準ずる者として、大学院修了後、臨床心理士試験を受ける者や学校教員経験者や相談業務経験者も含まれる。大分県のスクールカウンセラーは臨床心理士が人数では約8割を占めるが、担当校数では6～7割程度である。このようにスクールカウンセラーと言っても背景が違うため専門性も違ってくる。学校はスクールカウンセラーの経験年数や年齢、専門性を知って活用している。

スクールカウンセラーの職務

要項に示されているのは、1. 児童生徒へのカウンセリング 2. 教職員とのコンサルテーション 3. 保護者との相談 4. 教育相談に関する研修 5. 学校と相談の上、関係機関等との連携、である。最近では、この他に教職員のメンタルヘルス支援も期待されている。大分県のスクー

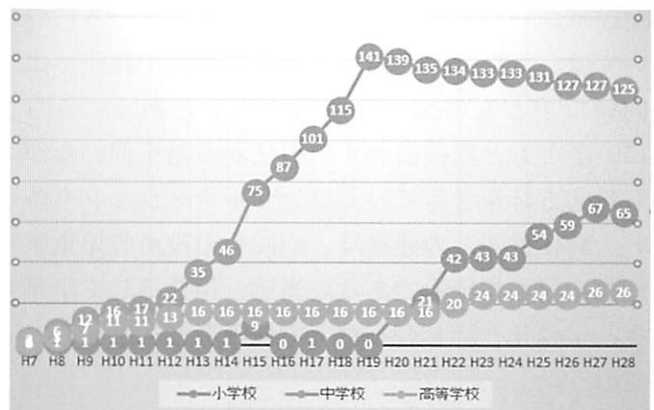


図2 大分県スクールカウンセラー配置校数の推移 (平成7年度～28年度)

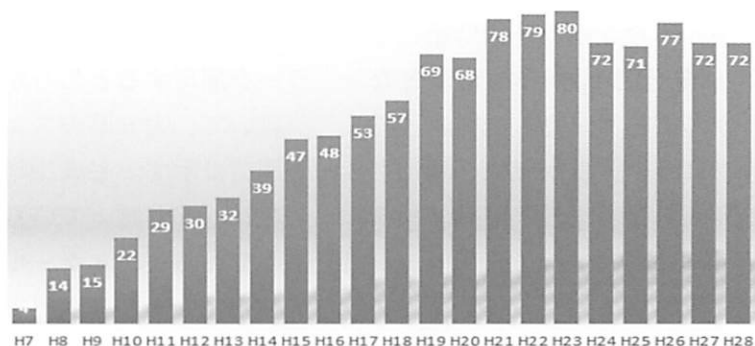


図3 大分県スクールカウンセラー人数の推移（H7年度～H28年度）

スクールカウンセラーの資格要件

【スクールカウンセラー】

- (1)財団法人日本臨床心理士資格認定協会の認定に係る臨床心理士
- (2)精神科医
- (3)児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識及び経験を有し、
教育法第1条に規定する大学の学長、副学長、学部長、教授、准教授、
講師または助教の職にある者又はあった者

【スクールカウンセラーに準ずる者】

- (1)大学院修士課程修了し、心理臨床業務または児童生徒対象の
相談業務について1年以上の経験者
- (2)大学もしくは短期大学を卒業し、心理臨床業務または児童生徒対象の
相談業務について5年以上の経験者
- (3)医師で、心理臨床業務または児童生徒対象の相談業務について
1年以上の経験者

図4 スクールカウンセラーの資格要件

ルカウンセリング勤務時間は週1回4時間が基本である。児童生徒が相談を希望しても、じっくりと話を聞くには授業時間を使うことになり、担任の許可が必要で、周囲の目などもありなかなか難しい。最近は学校の先生方も生徒の話をよく聞くようになっており対応も早いため、カウンセラーまで問題が来ないことも多いように思う。ただ、発達障がいや精神的な病気を疑われるケースについては、カウンセラーと子どもの面談や教室へ出向いて子どもの様子を観察するなどある。さらに、子どもと直接会わずに担任から話を伺いながら対応方針を考えていくコンサルテーションも多い。関係機関との連携は、病院や市役所の児童家庭課や児童相談所である。当然、担任そして学年長、学校長と話し合った上で保護者とも話し合っ

③ 当初の状況とその後

スクールカウンセラー配置当初

何事も初めてというのは、周囲の期待もあるが抵抗も強い。アレルギー反応のように、新しいものや異物を排除しようとする力が働く。

配置当初は、スクールカウンセラーに対して「教室には入らないで」「職員会議なので退室して」「まだ認めていない」といった抵抗を示した学校もあった。スクールカウンセラーが初出勤の時間に校門が閉じられたということもあったようだ。当時は教職員組合の組織率も高く、地域によっては存在そのものを受け入れてもらえなかった。

他方で、スクールカウンセラーを学校現場の仲間として受け入れようとした学校は、「先生には話せないこともあるだろうから、カウンセラーに

話をしてごらん。秘密は守ってくれるよ。」とスクールカウンセラーを生徒に紹介した。また、「相談室を生徒の心が休まる場所にしよう」「相談室を学校の中の異空間にしよう」と、一教室を暖かな印象を与える相談室に模様替えした。そして、相談室では生徒指導は禁止となり、居心地の良い空間にした学校もある。

スクールカウンセラーを受け入れたとしても、新参者は人の心を揺さぶる。スクールカウンセラーに対して「スクールカウンセラーはなんでも解決してくれる」「なんでもわかる」といった幻想、「私は心理学を学んでいます。ロジャーズの三原則をご存知ですか」といった挑戦、「カウンセラーは心を読む。話さないほうがいい。」といった誤解があった。しかし、これらは「学校現場を知らない人に任せてよいのだろうか」「子どもたちの問題は解決するのだろうか」といった大きな不安から発せられていたように思う。また、人間は所属集団の中で不満が募っている時、弱い者いじめの構造ができる。学校によっては、スクールカウンセラーはその標的になっているのかもしれないこともあった。スクールカウンセラーが集団から疎外されている状況と似たような状況は生徒間、職員間でも起こるものである。学校は集団の力動を肌で感じる場でもあった。

学校からの評価

平成7、8年度に筆者が勤務した学校のスクールカウンセラー配置調査研究報告書から、それぞれの立場からいただいたコメントを記したい。

養護教諭「スクールカウンセラーから受けたアドバイスは、これまでの私自身の価値観を大きく変えるものだった。」

一般教諭「細くなってしまいそうな生徒とのつながりをつなぎ止めていただいた。」

「保護者と話す前に、SCとロールプレイで練習したことが役に立った。」

保護者「相談しているうちに気持ちも落ち着き、救われたように思う。」

事務職員「コーヒータ임には事務室のみんなと心理学の話や雑談で楽しかった。」

暖かいコメントである。この学校では先生方と

の協働を一から学ばせていただいた。この経験がなければ、今につながっていなかったと思う。平成10年に伊藤が全国の配置校1661校、未配置校約1600校を対象に、スクールカウンセラーの活動について大規模な調査を行ったところ、配置された学校では評価が高く、拡充を望んでいるという結果であった。また、未配置校では、子どもをめぐる指導上の葛藤や教師自身の不安やジレンマを危惧しているが、実際にスクールカウンセラーを経験した教師はそれらをあまり強く認知していないことが示唆された。この調査結果も筆者を力づけた。

教師とスクールカウンセラーの協働～やってきたこと～

協働とはお互いの専門性を認めつつ尊重しながら、それぞれの専門性を活かしつつさまざまな事象にあたることを言う。スクールカウンセラーは外部の専門性を学校に取り入れることで問題解決を図ろうと投入されたものである。しかし、学校組織、教師の仕事、地域の様子など知らなければ、心理学の知識だけが関係者の頭の上を行き交い、実のある結果には至らないと思う。筆者はこの21年間、教師と協働して様々なことを行うことができた。これらを紹介したい。

【学校行事や授業で、教師とは違う視点で参加したもの】

- ・不登校生徒宅への家庭訪問…怠学傾向、福祉的援助が必要な生徒の場合は、効果があった。教師と共に訪問し、短時間であるが、教師は生徒に勉強を教え、スクールカウンセラーは保護者の話を聞くなどした。訪問当初は顔をやっと思わせるだけの生徒も、私たちの訪問を心待ちにしていた。一人の生徒の理解をそれぞれの立場から行うこと、生徒本人や保護者が教師以外の人とつながることには意味があったと思われる。
- ・いじめ予防プログラムへの参加…学校全体でのいじめ防止の取り組み「ピースバックプログラム」に参加した。これは国立教育政策研究所が提案するいじめ防止プログラムをある中学校で行ったものである。先生方と事前勉強会を行

い、グループワークやロールプレイの授業に関与し、少人数グループでの面接を行った。

- ・教育合宿の参加…中学1年生時に行われる教育合宿に参加し、前述のピースパックプログラムに基づいて、仲間づくりのグループワーク、協力を学ぶグループワーク、話の聴き方・話し方ワークを教師と共に行った。
- ・自殺予防教育…平成24年「自殺総合対策大綱」の大幅な見直しが行われ、当面の重点施策として児童生徒へストレス対処方法を身につけさせるための教育が推進されたことを受けて行ったものである。「こころの健康」や「ストレスとのつき合い方」の授業を教師と一緒にいった。
- ・PTAの参加…事前に生徒からアンケートをとり、その中の質問に答える形で、先生とスクールカウンセラーの討論に生徒や保護者も巻き込んでいった。発端は、最近の子どもたちは大人どうしの会話を聞く経験が少ないのではないか、というところから始まった。先生方との雑談の中で生まれた企画だった。生徒も保護者も参加して楽しい企画だったと思う。

【教師の協力を得てスクールカウンセラー独自の活動】

- ・1年生全員面接…入学後の学校不適應の予防が大きな目的である。担任以外の大人に自分のことを話す体験、聞いてもらう体験をすることで、短時間の面接ではあるが、スクールカウンセラーの周知や相談することへの抵抗感を軽減する効果がある。
- ・転入生面接…思春期での環境の変化は大きな不安をもたらす。転入生の不安を受け止め、学校適應を図る目的で行う。
- ・緊急支援…学校内外での事件、事故が起きた時の支援を行う。関係者へのカウンセリング、心理教育等を通じて、通常の生活に戻れる支援を行う。



振り返って、今思うこと

スクールカウンセラーは不登校やいじめに対応する外部の専門家として投入されたが、21年経過した現在、不登校は平成27年度、小学校0.42%、中学校2.83%と増加しており、いじめ認知率も増加している。また、この21年の間に学習指導要領は2回改訂された。学校も週5日になったが、ゆとり世代の反省から現在は土曜日授業も学校によっては行われている。また、かつては職員室で先生方と雑談ができたが、今はほとんどできないほど時間的余裕がなくなっている。先生方の指導する大きな声も聞かないし、いわゆるやんちゃする生徒も少なくなっている。反面、保護者との関係に苦慮する場面が多くなった。貧困やひとり親家庭の子どもも増えている。不登校の様相も複雑多様化しており、インターネットに絡む問題も多い。社会の変化に伴って、新しい問題が発生する。学校は常に地域の中にあり、地域の問題を反映する場である。これからどんな問題が起こるのであろうか。また、どんな喜びが待っているのであろうか。スクールカウンセラーは外部の専門家として、学校と協働し、それなりの成果をあげてきたが、そろそろ内部の専門家として受け入れられても良い時期ではないかと思う。

参考文献

- 伊藤美奈子 (2000) 学校側から見た学校臨床心理士 (スクールカウンセラー) 活動の評価—全国アンケート調査の結果報告 臨床心理士報 11 (2), 21-42
- 文部科学省 HP 平成27年度生徒指導上の諸問題に関する調査結果